

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 様

西暦 2026年（令和8年）2月 1日

研究者名 山崎 望

大学名・職位 中央大学・教授

第43回（2025年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

脱植民地主義時代における民主主義の探求
In Search of Democracy in the age of Postcolonialism

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This study develops a theoretical framework to reinterpret the rise of the Global South, the resulting multipolarization of the international order, and the transformation of liberal democracy from a postcolonial perspective. Globalization has created situations in which the “North” and “South” coexist within the same states. As internal heterogeneity increases, social cohesion weakens and political conflicts intensify. In this context, the study reexamines liberal democracy, which has long relied on the nation-state as its foundational unit, and seeks to imagine a new democratic model attentive to marginalized and previously unrecognized voices. The research presents three major findings. First, by analyzing right-wing populism in Europe and the United States, it identifies both its democratic dimensions and its yearning for community. The rise of right-wing populism is shown to reveal structural limits in governance through liberal democracy. Second, examining both domestic and international politics, the study classifies emerging political dynamics into three trends—exit, antagonism, and autonomy—highlighting how these transform existing institutions. Particular emphasis is placed on autonomy, with cases such as the Black Lives Matter movement and the ascent of the Global South illustrating emerging capacities for alternative order-making. Finally, through a critical reading of Kojin Karatani’s thought, the study explores possible alternatives to both liberal democracy and capitalism, proposing the concepts of a gift-based society and “isonomia” as conceptual resources for envisioning new forms of political and economic organization.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

本研究は、脱植民地主義の視点からグローバルサウスの台頭による国際秩序の多極化と、自由民主主義の変容を捉える理論枠組みを提示することである。グローバル化の進展により同一国家内部に、いわば「北」と「南」が併存する状況が生まれている。社会統合は弛緩し政治的対立が激化している。そこで本研究は、国民国家を基礎としてきた自由民主主義の在り方を再検討し、新たな民主主義の構想を提唱する。

研究方法として、まず右派ポピュリズムを分析し、その共同体希求的側面が自由民主主義の枠内にいかに対応可能か、を検討する。これにより、ポスト植民地化が進む現代における自由民主主義の有効性と正統性の低下について分析する。次に、国内外を横断する政治潮流を離脱・対立・自律という三つの動きとして整理し、自由主義とリベラルな国際秩序がいかに変容し新たな社会的可能性を生みだしているのか、を明らかにする。

かかる研究の意義は自由民主主義とグローバルサウスの溝が深まる中で、新たな社会を構成する共通の地平を明らかにする、という意義を持つことにある。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

まず脱植民地化時代の特徴として、国際秩序の多極化をふまえ、欧米諸国における右派ポピュリズムの台頭に焦点をあてた研究を進めた。右派ポピュリスト政党の言説 (discourse) に着目し、民主的側面と共同体の希求について考察し、右派ポピュリズムの批判の困難性を指摘した。他の政党によっても民主主義の再興と共同体の再建は困難であり、右派ポピュリズムの台頭は自由民主主義による統治の限界を示すものであることを明らかにした。

次に国際政治の側面を入れ、国内政治と統合して世界秩序の潮流を整理する研究を勧めた。具体的には既存の組織や制度からの離脱・対立・自律という三つの流れに分類した。離脱としてはグローバル化や新自由主義を、対立としては米中などの大国間対立と国内政治の対立の先鋭化を扱った。自律についてはBLM(ブラックライブズマター)とグローバルサウスの台頭について扱い、離脱とも対立とも異なる秩序形成の潜勢力を明らかにした。

BLMはアメリカ国内における人種差別を問題化しているのみならず、南アフリカ共和国におけるアパルトヘイト批判の歴史やイスラエルの抑圧に抵抗するパレスチナにおける思想や運動とも通底していることが判明し、歴史的射程の長い脱植民地化の影響が国内政治と国際政治を横断していることを示すことができた。

最後に脱植民地化の潮流の中で、相対的に位置を低下させている欧米社会に着目し、そこに起源をもちつつ危機にある自由民主主義と、反対に普遍性を有するに至ったとされる資本主義の双方の代替構想を、欧米の研究者と柄谷行人の思想の双方を考察することで提示した。

具体的には欧米の研究者による自由民主主義の危機論について整理した上で、主権国家と資本制の双方に否定的な姿勢を取り、贈与と「イソノミア」(民主主義を越える民主主義)に基づく社会を断片的に構想した柄谷の思想を批判的に再検討した、贈与社会論と近年の政治学の民主主義研究の考察を進めた。この研究成果は『思想』2024年9月号(岩波書店)に寄稿し、助成金によって関連する研究者に送り、政治学や文化人類学、哲学にわたる広範な研究者との意見交換を行った。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

研究成果として、まず欧米諸国で台頭する右派ポピュリズムが民主的な側面を持ち、自由民主主義が揺らいでいることを論じた「右派ポピュリズムが問いかけるもの」を『現代思想』12月号(青土社)に掲載した。次に国内／国際政治の双方で、離脱・対立と並んで「自律」の潮流について、BLMとグローバルサウスの台頭を事例に考察した論文を日本国際政治学会編『国際政治』に掲載予定である。最後に西洋が主導してきた自由民主主義と資本主義の代替案を提唱した「資本主義／自由民主主義から、贈与社会／イソノミアへ？」を『思想』(岩波書店)に掲載した。

以上